

vol.

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



ムッシュは つらいよ

気の向くまま、風の吹くままに、今日も旅を続けるムッシュ・トラ。
オレンジナを飲みながら巡る街々で、ほろ苦い恋の思い出がよみがえる。

今回の舞台は…

ブラスリー オザミ

丸の内店

大きなビルのあいだにふっと存在する
小さくて居心地のいい空間のカフェ。
細長い奥のテーブル席に座ると
そこはもうパリ。



テーブル席のほか、これからの季節、気持ちのよいテラス席も。丸の内散策の途中に立ち寄りた。

#01 『すこしと、まったく』

「すこし違うは、まったく違うより、ずっと
たちが悪いのよ。」

とある日の昼下がり、カフェのテラス席で
オレンジナを飲みながら、僕はいつかの
彼女のことを思い出していた。店の目の前を
猫がふらりと通り過ぎたからだ。

「犬より猫が好きなの。」

出会った日、彼女はそう言った。

「ただ、猫が好きと言いなながらアビシニアンだ
のマンチカンだの、血統書にこだわる人とは
仲良くやれる自信がないわ。街を気楽に歩く、
あの所在なさが猫らしさだって、ねえ思わな
い？」

僕は彼女の気難しさに、少し驚いて、どこ
か懂れて、すぐに魅かれていった。彼女の好



きな本を好きだと思った。部屋の壁紙を彼女
と同じ真っ赤に変えたくなった。腕時計をす
るのをやめた。彼女の偏屈で可愛らしいこだ
わりにビタリとはまることだけを考えていた。
一歩一歩、彼女に近づいていっているような、
そんな気分だった。けれど違っていた。

僕から誘ったその映画は、彼女がずっと見
たがっていた作品のリバイバルだった。主人
公がふられるシーンで僕は小さく笑った。そ
のシーンで笑ったのは、僕だけじゃなかった。
どちらかと言えば映画館のほぼ大半の人が笑
っていた。けれど彼女は小さなため息と一緒
に僕をちらりと見たあとで、つないでいた手
をすつとほどいた。

その帰り道、彼女は僕にぼつりと言った。
「すこし違うは、まったく違うより、ずっと
たちが悪いのよ。」
僕は彼女の目を見ることができなかった。
「私とはまったく違うあなたを、私は好きに
なったのに。」

オレンジナの氷がカランと鳴った。さつ
きの猫が戻ってきて、ニャアと所在なさそう
にないた。



文・太田裕美子 監修・高崎卓馬

illustration:Aki Kobayashi
photo:Tetsuka Yamaguchi
styling:Megumi Nishimori

問い合わせ先 / サントリーお客様センター
0120-139-320 orangina.jp



ブラスリー オザミ丸の内店

人気のブラスリー。平日は日替わり、土日祝日は限
定プリフィックスコースが人気。ランチのほか、生ビ
アノ演奏が流れるディナータイムなど、時間帯を問わ
ず充実した時間を過ごせる。●千代田区丸の内3-3-1
新東京ビル1F ☎03-6212-1566 ①11:30~24:00 (土
11:00~、日祝11:00~23:00) 夜のみサービス料10%

